

第十八章 鎌倉 一 腰越状

清水寺の舞台の下の一面の桜も葉桜に変わり、薄紫の藤や赤いさつきが咲き始めた頃、兄の小太郎重房が久しぶりに訪ねてきた。小太郎は、凱旋後自分の宿所を持っていたのですこし疎遠になっていた。郷子は、もんもんとして眠れない夜を送っていたので、兄が訪問してくれたのが嬉しかった。

「御所さまのご命令で、捕虜の護送を兼ねて鎌倉へ凱旋することになった。俺もようやく父と母がいる鎌倉に帰れるよ」

「義経は？」

郷子は、心配になって尋ねた。

「判官が行かなくてどうする。平家討伐の最大の功労者だぞ」

「蕨姫を側室などにして、頼朝さまは怒っていないでしょうか」

「それは怒っているだろう。確かに、あれはおかしいと俺の傍輩^{ほうばい}もみんな言っている。今度護送する宗盛親子も姻族になってしまった。判官は、鎌倉でこの二人の助命を嘆願するのではないかと噂している。平家によって多くの仲間が殺されたのに、その総大将の助命を嘆願するなど納得できないと騒いでいるよ。頼朝さまも同じ意見だろう」

「それなのになぜ側室などにしたのでしょ」

「さあ、都での判官の人気は前にも増して沸騰しており、それこそ尋常な様子でないからな。法皇からは、何度も呼び出しがかかるし、それを見て公卿連中も判官に擦寄り^{すりよ}、どんなつまらない話でも判官と口をきいたことが、自慢になるほどだ。判官が都大路を通りかかると女房や娘どもが、一目見たいと嬌声をあげて駆け寄ってきて取り囲みすぐに身動きが取れなくなってしまう。判官が、天下を取ったような気持ちになるのはわからないではないな。特に大納言の娘など普通は武士などが近寄る事も許されない貴種だから、その娘を抱く絶好の機会を失いたくなかったのかもしれない。お前も知っているとおおり、判官はとてつもなく女好きだからな」

「若い男は、みんなそうなのでしょ」

郷子は、腹が立っていった。

「ははは、それはそうだが、敵方の捕虜の娘を嫁に貰うのは、まずいと思うくらいの分別はあるさ」

「義経を尊敬しているものも沢山いるのではないですか」

「判官を好きなものも結構いる。軍兵は我らが総大将が都の英雄になって騒がれるのが自分のことのように嬉しいのだ。自分達もその恩恵にあずかれるからな。義経軍というだけで、遊女からちやほやされたり物をもらったりする。敵の貴族の娘をものにしてしまうのも、英雄がやれば格好いいのだ。しかし、侍が上位になればなるほど判官の異常な人気を妬んでいるものが増えてきているのはたしかだ。俺達が必死になって戦って勝ったのに、一人で勝ったように賞賛されているは不愉快だと。それにいくら美貌とはいえ平家である

公卿の娘を側室に取るなど言語道断で、そんな事のために俺達は闘ったのではないといきまいているよ」

「義経は、そんな不満に気付いていないのかしら」

「判官は、天真爛漫だから、我儘な子供のように自分の欲望に忠実なのさ。欲しいと思ったら、どうしても手に入れないと気がすまない。他の者がどのように思うかなどということまでは気が回らないのさ」

「でも、頼朝さまが怒っていることには気がついているのでしょうか」

「それは、梶原殿が頼朝さまにぎんげん讒言しているからだと思込んでいるらしい」

「梶原殿は、どのような讒言をしているのでしょうか」

「聞くところによると、『軍兵は全て主君である頼朝さまのために戦っているのに、判官殿は、代官である立場を忘れて、まるで自分の私有軍のように取り扱って命令を下し、勝手に恩賞を与えたり処罰などをしている。戦の勝利は将兵全員の必死の努力の賜物であるのに、自分一人で勝ったように公言している。そして戦勝の成果は本来頼朝さまに帰すべきものであるのに、それを無視して自分個人の成果であるかのごとく吹聴している。その上、敵から側室を献上されて喜んでいる。こころある者は、これを嫌って早く頼朝さまのもとに帰りたいと願っている』というのだ。みんなが一刻も早く都を離れ自分の故郷へ帰りたいと願っている事は事実だから、巧妙な言い方である事は確かだ」

「鎌倉へ行って義経は大丈夫でしょうか」

「判官は、あまり心配していないようだ。確かに許可を得ずに任官したり、神剣は見つけられなかったし、捕虜の娘を側室にしたが、平家滅亡という大成果のまえではたいていの事は許されてしかるべきだと思っているのだ。なんととっても血の繋がった兄弟だ。鎌倉へ行って兄者と直接顔を合わせて話せば、兄者は判ってくれると楽観しているのだ」

「そうでしょうか」

郷子は、大江広元の顔を思い浮かべた。彼が心配したように、将に公卿と姻戚関係が成立したのである。それも、敵である大納言の娘である。

「まあ、行って見なければ判らないが、判官は一応俺の義理の弟だから、できるだけ支援はするつもりだ」

「兄上、よろしく願いいたします」

「お前は、よけいな心配はせずに、ただ丈夫な赤ん坊を産むことだけに専念していればいい」

兄は、そう言い残すと故郷に帰れる喜びを発散させながら帰っていった。

数日後、郷子は、義経の鎌倉への出立を見送るために、志乃と一緒に堀河館に向かった。館内は、出立の準備で大混雑していたが、そんな中で、出陣と違ってさすがにはでな赤地の鎧は身に着けていないが、立烏帽子に模様の入った明るい空色の直垂を着て、黄金造りの太刀を穿いた義経は一人目立っている。そんな義経は、伊勢義盛と話していたが大きな

お腹をかかえている郷子を見つけると話を止めてすぐに傍に寄ってきた。

「大きくなってきたな」

義経は、郷子のすこし膨らんだ腹に、桂の上から手を添えると言った。

優しく思いやりのある態度だった。

「道中お気をつけて」

郷子は、話すことが沢山あったが、これだけしか言えなかった。

「判っておる。俺の初めてののややだ。立派なややを生むために栄養をつけて養生するのだぞ」

それから、郷子の後に向かって言った。

「良く来てくれたな。心配しておったのだぞ」

郷子が、振り向くと静が立っていた。

「わたしこそ心配で見送りに参りました」

「なあに、戦に行くわけではない。凱旋して帰るのだ。こんな気楽な旅は初めてだ」

義経は、上機嫌だ。

「そうだ二人に良く頼んでおきたい事がある。蕨のことだが、あれはお前達より九歳も年上だが、^{しんそう}深窓で世間から隔離されて育てられたせいか、何もわからん姫だ。俺のいない間は、寂しいがと思うから良くなぐさめてやってくれ」

「・・・・・・・・」

義経のこの無邪気さはなんだろうか。女性の立場から物を考えた事などないのだろう。二人の沈黙をどう受けとったのか判らないが

「では、よろしく頼んだぞ」というと、離れていった。

義経の向かう先には、これぞ貴族の娘という感じで小さな童女のような蕨姫が立っていた。細面の顔に真っ白な白粉を塗り、一重の切れ長な目と細い鼻、小さな唇に紅をつけ、眉は真っ黒にかいてある。つややかな黒髪はきれいにすかれて腰の下まで伸びている。体が細いからだろう、色とりどりの桂を重ねているが、すっきりと着こなしている。

義経が、蕨姫に話しかけながら、郷子と静を指差すと、蕨姫はこちらに顔を向けたが、すぐに俯いてしまう。なんとなくはかなげで頼りなく見える。そして、義経の胸に手を添えながら心細そうに何か訴えている。

(わらわには、武士の娘や白拍子などのお付き合いなどとてもむりどすえ。かんにしておくれやす) などとのたまっているに違いない。二十六歳というから、(何が良くてそんな年増を物好きな) と思っていたが、遠くから見る限り九歳も年上であるとはとても思えない。(白粉をたくさん塗って皺を隠しているのだわ。だからきつと近くで見られたくないのだ) どうしても、意地悪く思ってしまう。義経は、ああいったが、郷子と静がもまともに話せる相手ではなさそうだった。

堀河館のつつじが咲き乱れるなか義経の凱旋軍が出立すると、大路の両脇を大勢の見物人が人垣をなしてその華麗な行列を見送った。やはり人気の的は義経一人に集中していた。

義経は得意の絶頂で、上機嫌に笑みを浮かべている。しんがりに続く前内大臣平宗盛親子が乗せられた捕虜護送用の車を群衆は争って覗き込んだ。また、法皇がお忍びで見送りにするという噂もあった。これは、異例の事態であった。

義経が堀河館の正門をでていってしまうと、郷子は、義経が静に「良く来てくれたな。心配しておったのだぞ」と言っていたのが気に懸かかったので静に訊いてみた。

「蕨姫が、堀河館に来た時には、どこかに移っていたのですか」

「三条の実家に帰っておりました。母の池の禅師からは、人の世話になるよりは白拍子として独立しなさいといつも口癖のように説教されているのです。男心はうつろいやすいが、芸で身を立てれば誰に気兼ねをすることもなく生きていけるというのです。母は白拍子の元締めのような立場にいますから、芸がおろそかになることを心配していることもあります。ただ、そういわれてもなかなか割り切れなくて……」

静は、率直に話した。郷子は、義経に腹が立った。本人にその気が無くても、いままであれだけ寵愛した静を家から追い出すような結果になった。(あの能天気)と義経に毒づきながらも、心の中では義経への思慕が湧き上がってくる。きっと、静も同じ気持ちなのに違いない。だから、池の禅師に諭されても(なかなか割り切れなくて)、こうして義経を見送りにくるのだ。

「まったく困った人ね」郷子は、穏やかに言う。

「それに母が言う事が気になって」

「義経のことで？」

静は頷く。

「母は、都で最も著名な白拍子の名手ですから、色々な分野で栄華を極めた多くの人に招かれて、その方々の前で男舞を披露する機会が多いのです。そのような栄華を極めた人たちは、もう有頂天になっていて、沢山の御祝儀を気前良く下さるのだそうです。しかし、ほとんどの人は、その頃を境に栄華を失い、世の中から消えていったとのことでした。ひどい人はいまは食うにも困る有様だとか。母が言うには、義経さまは、いまが頂点だろうと言うのです。後は、落ちぶれるだけだと。しかも、それには裏づけもあるのです。母は、最近新しく中納言になった藤原能保殿よしやすの宴会に招かれたそうですが、この方の妻は頼朝さまと同腹の実の妹なのです。従って、藤原能保殿は、頼朝さまの義理の弟ということになります。そのためもあって、この度中納言に目出度く出世したとかいう噂のある御仁です。この御仁が母に頼朝さまからの手紙を見せてくれたそうです。そこに書かれていたのは、[義経は、頼朝の代官であり、その将兵はすべて鎌倉の支配下にある。ところが、義経は平家を滅亡させたと報告してきたにも拘らず、大納言平時忠の娘を側室に迎えて、自立をたくらみ、鎌倉の将兵を自分の支配下に移そうと画策している。貴君は、それを阻止すべく、都にいる鎌倉の将兵たちに今後は義経に従ってはならないと内々に触れ回って欲しい]という文面だったそうです」

郷子は、体が冷たくなって足が震えるのを感じた。

(義経が自立などを考えてもいない事は明らかだった。だが、平家が滅亡したいま、もう義経は有害な阻害要因以外の何物でもなかった。だから言いがかりをつけて、義経の力を剥奪しようとしているのだ)

「その手紙の内容を義経に話してくればよかったのに」

「でも、蕨姫に嫉妬して言っているなど思われたくなかったものですから」

「それで貴女は今後どうされるおつもりですか」

「あの蕨姫は、義経さまがいなければ、この屋敷に用があるはずも無く父の時忠殿が蟄居^{ちつきよ}している実家に帰られると思いますので、帰られ次第この屋敷に戻って、義経さまのお帰りを待ちたいと思います」

静は、義経の前途が危ういことが判っていても、義経から逃げ出す気はさらさら無いのだ。静が、義経を愛していることは明らかだった。郷子も、そんな静が頼もしくもあり、信頼できる友人のように思えるのだった。

六条室町亭に帰って数日後、志乃に堀河館の様子を調べてもらおうと、静が言ったとおりに、蕨姫は義経が出立したその日のうちに実家に帰り、いまは静が従来通り住んでいるという。それを聞いて郷子は安堵した。どだい蕨姫など貴族の娘が武家屋敷などに落ち着けるわけがない。実家では毎日白粉を塗りたくって、雛人形のように着飾り、庭でも眺めながらひがなぼつとして暮らしているに違いない。いままで父親が裕福だったから、そのような生活も出来たが、その父親が流人となって遠国に流され所領も没収されれば、家も収入もなく、路頭に迷うところだったのに、義経が助けるようなかたちになった。

(まったくあのお人よしが)と近頃突き出てきた腹をさすりながら思うが、そこで、もしやしてこれが嫉妬というものだろうかと自分で驚いたりする。しかし、郷子は、これは嫉妬ではないと思う。蕨姫の存在自体が、義経の身の危険の元凶になっているのだ。妻が夫の身を案じて、そのような危険の元凶を悪く思うのは当たり前のことであって、男女間の嫉妬の問題とは断じて違う。そう考えても、何の気休めにもならなかった。

捕虜を護送していった義経の動向が判らないままに一ヶ月程が過ぎた。

義経に対する心配をよそに、郷子は、食事がおいしくていくらでも食べられる。

郷子の腹はおへそを中心にして前にせり出してきて、目に見えて大きくなった。体の重心が前に移動したためか、軽い腰痛があり、ふくらはぎがこむら返しを起こしそうになったりする。それにもともと大きめの乳房に触ってみると、堅く張ってきていて、乳首から薄い黄色みを帯びた汁がでてくる。少々ものぐさになってきて、うっかりすると衣裳もだらしなく着てしまうので注意しなければならない。

そんな折、母の河越御前から懐妊を祝う文と共に長さ六尺ほどの白木綿が送られてきた。

小太郎からお前が懐妊したと聞きました。それを聞いて母は飛び上がるほど嬉しかったで

すよ。初めての孫なのだから当然でしょう。それなのに、お前の父は随分早かったなと言うだけなのです。だから、郷子は健康な子だから、すぐにややが出来るのは当たり前でしょうとやってやりました。まあ、あの人のことだから本心では喜んでいるのに、武士がこういったことに喜怒哀楽を表わすときと活券^{こけん}にかかわるなどと思っているのですよ。それはそれとして、とにかく体に負担がかかる無理な運動や背伸びなどをしてはいけません。乗馬や武芸などはもってのほかですよ。流産の恐れがありますからね。丈夫な子供を作るためにご飯だけではなく新鮮な野菜や魚を沢山食べなさい。特に小魚は、立派な骨と歯をつくるものになるものですから、わすれずに取りなさい。着帯祝いのための白木綿を送ります。これをお腹にまいて祈れば安産になるといわれています。妊娠五ヶ月目の戌^{いぬ}の日に行くといいといわれています。頼家さまは、どんどん大きくなられているのに、まだ甘えてくるのですよ。本当にかわいいわ。そんなこんなで、残念ながらあなたのお産の手伝いは出来そうにもないけど、頑張っ

母より

郷子は、父の態度になにか不自然なものを感じた。披露宴の時父は言った。
[個人的には、判官義経殿のお世継ぎである孫を出来るだけ早くこの爺の腕に抱きしめたく、婿殿には、夜討ち、朝駆け、食前、食後攻めまくって、戦勝の恩恵を獲得していただきたいく切にお願いする次第でございます]
この決して上品とはいえない演説からも、父は郷子の妊娠を人一倍喜んでしかるべきである。それなのに、父は「随分早かったな」と言ったという。郷子は、納得できなかった。この裏に父が、郷子が義経の子を孕^{はら}んだ事を懸念する何かがあるに違いなかった。鎌倉で義経の身に何が起きているのだろう。郷子の心配は尽きない。

数日後に、須美が珍しく郷子のいる六条室町亭に顔を出した。

「御無沙汰しております。侍女として何のお役にも立てず心苦しく思っております」

「お気遣いの必要はありません。わたしには志乃一人で十分たりておりますから」

「御台所さまから、伝言を承ってまいりました」

「どのような事でございますか」

郷子はなんとなく不吉な予感がした。

「御台所さまが申しますには、『郷姫が大倉御所を訪問していらい、大姫の氣鬱^{きうつ}が解消し、日に日に元気になり今では普通に生活できるようになった。大姫は、その理由を誰にも話さないが、対面の際の大姫の言動からみて、郷姫から何らかの生きる力を得たのに違いない。それで、感謝の念を込めて、郷姫のために恩をお返ししたいと思っている。もともと、義経と郷姫の婚約は、頼朝がかってに決めたもので、郷姫は誰も知り合いのいない京の都でさぞや苦勞しているであろう。懐妊したと聞いたので、この際、故郷の河越に帰り、実家を出産したらよいと思うがどうであろう』ということでした」

確かに、実家で出産するのが一般的かもしれないが、夫の義経に相談することなく実家に帰るわけにはいかないだろう。

「義経は、都での役割を終えて鎌倉の居館へ戻れるのでしょうか」

「さあ、それは判りませんが、恐らく……」

「恐らく、为什么呢か」

「わたくしごときには判りません。御所さまがお決めになることでございます」

「恐らく、鎌倉へ帰れないのですね」

「……」

須美は、軽く頷く素振りを見せた。

「それでは、わたしも実家には帰りません」

「御台所さまは、あなたのことだけではなく、父上重頼殿や兄上小太郎重房殿のことなど、全てを考慮して実家に帰られることをお勧めしているのでございますよ」

「政子さまの御厚情は、身に余る光栄でございますが、父からは『安易に実家に帰れると思ったら大きな間違いぞ。もう実家はないものと思え。いいかこの点を肝に銘じて、婿殿に尽くすのだ』と言われておりますし、わたくしも父の言う通り、夫の傍にいて夫を支えるのが正室の務めと考えておりますので、ここに留まりたいと思います」

「御台所さまは、『郷姫さまが、義経さまをお好きになって輿入れされたわけではないのですから、そこまで義理立てするには及ばないし、まして、正室をさておいて、女遊びに精を出し、白拍子はもとより敵の娘にまで手を出すとあつては、もはや正常な夫婦生活を営むことは望めないように思われます』とお考えなのです」

郷子は、(それでは頼朝さまの女遊びはどうなのですか？それでも夫婦生活はうまくいっているではありませんか) と言い掛けたが、政子の話にことよせているが、実際には須美の意見だろうと思い、口の中に飲み込んだ。

「御心配にはおよびません。義経に義理立てしているわけではありません。わたしは、そんな義経が好きなのです」

須美は、武芸者のなんでも見通す目で郷子の目を覗き込んだ。そして折り目正しく言った。

「判りました。その旨御台所さまにお伝えいたします。大変失礼いたしました」

須美が辞した後、郷子は、須美が話した内容を反芻^{はんすう}してみた。

義経が鎌倉に帰る事は無いのだろう。政子は、郷子を義経から離れさせて実家に帰そうとしている。その背景には、頼朝が決めた政略結婚であることの負い目と娘の大姫が元気を回復した恩義がある。義経と郷子の縁が切れなければ、義経の姻戚ということで父や兄に累を及ぼす危険がある。郷子は、暗澹たる気持ちになった。政子の言うとおりの郷子が義経と離縁して、実家に帰れば実家の問題は解決するのだろう。しかし、郷子は、もともとそんな風に物事を割り切れる女ではなかったし、その上あまりにも義経を愛し過ぎていた。郷子は、もう決して義経と別れられないのが判っていた。

留守役の重平老が、義経から都に帰ってくるとの連絡があったと伝えてきた。そして、都を出立した義経凱旋軍が本来の目的を果たせずに京へ帰還の途につくまでの経緯が伝令の報告により明らかになった。

義経凱旋軍は順調に行進し、箱根山麓を越えて酒匂川に到着した。その日は、そこに宿泊し翌日鎌倉に入ることにしていた。

その夜、義経の宿所に頼朝の岳父である北条時政がわずかの郎党を引き連れ訪問してきた。義経が威儀を正して面会すると、時政はこう言った。

「鎌倉殿の使者として参った。鎌倉殿が言うには、『壇ノ浦の合戦における貴殿の働き、まことに天晴れであった。その功に報いるため、伊予守に任ずべく、もうすでに申請書を朝廷に出してある。遠からず宣旨が出るはずであるから、楽しみに待っていよ。また、宗盛以下の捕虜の護送ご苦勞であった。本来、捕虜の護送などというものは、部下の侍大将が行うもので、將軍自らを取り扱うものではないのにかかわらず、つい便宜上九郎に頼んでしまったが、ここからは、時政が宰領せよ』とのことでござった」

そういって、時政は書面を懐から取り出して義経に見せた。

それには[宗盛以下の捕虜は、時政が宰領して鎌倉まで引き具せよ]と書いてあって、頼朝の署名があった。

「それで明日にも、この時政が捕虜を引き取って鎌倉へ連れて参るので、貴殿は鎌倉の準備が整うまでもうしばらくここに滞在されたい」

時政は、一方的にこういって、翌早朝には、捕虜を引き連れて早々と出立してしまった。驚いたことに、武蔵坊弁慶や伊勢義盛などの義経子飼いの部下と西国出身の将兵を残して、その他のほとんどの板東出身の将兵がその日のうちにいなくなっていた。残っていた西国出身の将兵から話を聞くと、北条時政が捕虜の引き具に必要だといって、彼らを連れて行ったという。判官殿の許可を受けなくていいのかと訊いたところ、お前達の主君は鎌倉殿であるから、その命令があればいいので、義経の許可など必要ないと怒鳴った。みんなも一日も早く故郷に帰りたいと願っているものばかりだから、一も二も無くついて行ったという。

義経は、鎌倉から何の連絡も無いまま酒匂に数日間取り残された。時政は「鎌倉の準備が整うまで」といったが、何の準備かは言わなかった。それで、義経は、鎌倉へ伝令を送り、酒匂から腰越まで歩を進めた。腰越からは江ノ島が遠望でき、鎌倉まではもう目と鼻の距離である。しかし、義経はそこで待機していた頼朝の軍勢に阻止されそれ以上は進めなかった。義経は、頼朝の本意が判らぬままに、事態を打開するために、大江広元に窮状を訴える書面（腰越状）を送り、頼朝へのとりなしを依頼した。

武蔵坊弁慶が創案した書面の要約は次の通りであった。

佐衛門少尉源義経恐れながら申し上げます。

鎌倉殿の代官として、苦勞の末、朝敵を滅ぼし、行賞を得られると思っておりましたところ、

こころ ざんげん
虎口の讒言によって莫大な勲功を黙殺されました。義経は、罪も無いのに咎を被り、御勘
気を受けたので空しく紅涙を流しています。

鎌倉入りも許されませんので、お目にかかって本意を伝えることも出来ません。

亡父の霊がよみがえってこない限り、誰も義経を哀憐してはくれないのです。

義経は、生まれると直ぐに父左馬頭（義朝）を亡くして孤児となり母の懷中に抱かれ大和
国宇陀へ逃げました。その時以来、片時も安堵の思いをしたことは一度もありません。身
を隠しながら諸国を流浪し、艱難辛苦をなめました。

ところが幸いにも、純熟の機会を得て平家一族追討のために上洛し、木曾義仲を誅滅後、
平家追討のために、ある時は命をなくするのを顧みず巖石の上を駿馬で駆け、またある時
は、身を海底に沈め鯨の餌になるのを厭わず漫々たる大海に風波の難をしのいで闘ってま
いりました。これも一重に亡き父の怨みをはらし、多年の宿望をとげようとする思い以外
にはなかったのです。

そのほか、義経が五位尉判官に任ぜられたことも、源氏としては稀代の重職であり何より
のことではないでしょうか。

しかしながら、いまは深い愁いと痛切な歎きに身をさいなまれています。

神仏のご加護がなければ、この愁訴をお伝えすることが出来ないのでしょうか。

そこで、諸神社の護符の宝印の裏面に、全く野心などない旨を、日本中の天神地祇（天の
神と地の神）にかけて祈り、数通の起請文を書いて鎌倉殿へお届けしましたが、なおお許
しがいただけません。

そこで、ひとへに貴殿の広大なる御慈悲を仰ぎ、いい機会を見て鎌倉殿へ義経には罪の無
い旨とりなしていただきたく、伏してお願いする次第でございます。

佐衛門少尉源義経

元暦二年六月五日

因幡守 大江広元殿

この書面に対して広元から、[頼朝さまからは明確な返事は無く、いずれ何らかのご指示が
あるだろう]という回答があった。

数日後、結局義経は頼朝に面会できぬままに、捕虜の宗盛・清宗を連れて、京へ帰り、二
人を誅殺せよとの指示を受けた。

郷子は、この腰越状の内容を聞いて、義経や弁慶などは、頼朝が義経を忌避している理由
を判っていないと感じた。

自分のつらい生き立ちと父の恨みをはらすなどのあまりに情緒的な義経の思いと、厳し
い流人の生活を経験しながらも、いままさに朝廷からの独立を目指して幕府を創設しよう
としている頼朝の革命的な思想との間には、埋めがたい乖離があるように思える。

頼朝は、義経が法皇の寵を受けて、従五位下の殿上人となり、公卿と交流を深め、挙句
の果ては公卿の娘を側室にとって、その父親の助命を嘆願するなどの親貴族的な動きを問

題にしているのだが、義経はまったくそれに気付いていない。

また、自分の死をも恐れぬ闘いで偉大な戦果を上げたことを誇り、莫大な勲功を当然のことであると見做して、それを得られないのは讒言のせいだとする態度は、安徳天皇を水没させ、三種の神器の一つである神剣を回収できなかったことを問題視する頼朝を不快にさせるだろう。

さらに、義経が野心が無い事を強く弁解すればするほど、義経が頼朝に代わりうる血脈の持ち主であり、かつ稀代の戦争巧者であるという潜在的な危険性を逆に強調することになり、過敏な神経の持ち主である頼朝を恐れおののかせているのだ。